

Title	2015年度短期日本語教育プログラムの実施と新たなプログラムの構築
Author(s)	磯野, 英治; 近藤, 佐知彦; 宮原, 啓造
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 20 P.19-P.24
Issue Date	2016-3-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/55554
DOI	
Rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>

2015年度短期日本語教育プログラムの実施と新たなプログラムの構築

磯野 英治*・近藤 佐知彦†・宮原 啓造‡

要 旨

本稿では、国際教育交流センターの短期プログラム開発研究チームと日本語教育研究チームが協働のもとに行っている短期日本語教育プログラムである「J-ShIP」および「超短期プログラム」の2015年度の実施状況を報告した。その中で、新たなプログラムの開発の背景や短期日本語教育プログラムの意義と可能性を併せて論じている。

【キーワード】 J-ShIP、超短期プログラム、海外の大学の潜在的ニーズ、短期日本語教育プログラムの国内的な意義

1 はじめに

大学において国際交流が盛んになり、学部・大学院正規生や研究留学生の増加のみならず、3週間から2ヶ月程度の期間で、日本語を主専攻あるいは副専攻として学ぶ学生、または日本に関心のある初習者を受け入れ、日本語教育を行う大学も増えてきた。そして、本学の国際教育交流センターにおいても、例年3週間の通称「超短期プログラム (Intensive Program、短期研修型日本語・防災プログラム)」と4週間及び8週間の「J-ShIP (Japanese Short-stay In-session Program、学期内日本語専修短期研修型プログラム)」が複数回実施されている (近藤 2009、2012)。本稿では、例年行われている本センターのプログラムの実施概要を2015年度に新たに開発したプログラムと併せ、年度を通じた実施の流れ (各プログラムの概要) とその内容 (各プログラムにおける日本語教育の内容) を報告し、このような短期プログラムの定期的な実施が大学の国際化にどのような効果として期待できるのかを論じる。

2 2015年度のプログラム実施状況

2015年度には超短期プログラム2回、J-ShIP3回

の計5回が行われた。以下の表1から分かるように、それぞれのプログラムは、諸外国の大学との休暇期間のずれやJASSOから獲得する奨学金の設計といった課題¹⁾から、本学の授業期間に重なるかたちで実施されているものも少なくない。それぞれのプログラムの開講時期を以下の表1に示す。

表1 2015年度のプログラム実施状況

開講プログラム名	開講時期
Summer J-ShIP	6月19日～8月13日
Mid-Summer J-ShIP	7月13日～8月13日
夏超短期プログラム	8月2日～8月22日
Winter J-ShIP	12月7日～1月29日
春超短期プログラム	2月2日～2月23日

3 それぞれのプログラムの実施概要と日本語教育の内容

3-1 Summer J-ShIP の実施概要

Summer J-ShIP は、大阪大学において2011年から運営されている短期研修型の留学受入れスキームである。海外協定校から寄せられる日本語教育ニーズに答えるべく、派遣元大学の推薦を受けた学生に向けて高品質な日本語教育を実施している。1学年分

* 大阪大学国際教育交流センター特任准教授

† 大阪大学国際教育交流センター教授

‡ 大阪大学国際教育交流センター准教授

の日本語教育を先方の長期休暇期間に合わせてカスタマイズし、集中実施することがプログラムの特徴である。本プログラムでは、日本語初習レベルの学生を対象とした8週間の教育を提供している。2015年度も本プログラムをはじめ後述のMid-／Winter-を含めたJ-ShIPプログラム全体に対して（独）日本学生支援機構（JASSO）から支援（宿舍支援および奨学金：協定受入）を受けている。

3-2 Summer J-ShIP の日本語教育の内容

Summer J-ShIP は、日本語を初めて学ぶ学習者を対象として日本語教育が行われ、計41名の参加者があった。学生達は、アカデミックオリエンテーションにより授業（担当講師の紹介、日々の学習内容や宿題）および成績評価について説明を受け、その翌日から授業がスタートする流れになっている。アカデミックオリエンテーションではシラバスとテキスト、日々の授業スケジュールをもとにアカデミックコーディネーターが授業に関する概要を英語で説明し、オリエンテーションの後半には、学生達の状況を把握するための Background Questionnaire と Placement Test を行った。そしてその結果を踏まえて41名を3クラスに分けている。本プログラムでは、ひらがなとカタカナの学習に関して事前に先方に自立学習できる練習シートを配布し、開講と同時にひらがなとカタカナのレビューを行った上で、すぐに当該テキストのユニット1に進めるよう設計されている。しかしながら、初習レベルとは言え参加学生の背景は様々であり、日本に強い関心を持ち日本語への学習意欲も高い、あるいは既に日本人の友人がおり、直接的な会話やインターネット等を通じて簡単なコミュニケーションを取っているというような学生は、語彙や短文レベルの文字がプログラムの参加までに書けるようになっている、ということも珍しくない。以上の理由からアカデミックオリエンテーションで行った上記2点を参考として、本プログラムではAクラスを少し進んだクラス、B,Cクラスを初習と位置づけてクラスを編成し、Aクラスはユニット3から、B,Cクラスはひらがなとカタカナのレビューから開始することとした²⁾。以下の表2,3を参照のように、学生達はカリフォルニア大学各校からの参加が主であり、様々な専攻の学生達がプログラムに参加している。加えて表4に本プログラムにおける日本語教育の内容を示す³⁾。

表2 Summer J-ShIP 参加学生の概要

大学	人数（単位：人）
UC, Berkeley	12
UC, San Diego	5
UC, Los Angeles	5
UC, Santa Barbara	7
UC, Irvine	2
UC, Davis	3
UC, Riverside	2
University of Kentucky	2
UC, Santa Cruz	1
New York University, Shanghai	1
University of Macau	1

表3 Summer J-ShIP 参加学生の専攻

専門分野	人数（単位：人）
Actuarial Science	1
Biochemistry	1
Business Administration	2
Business Economics	1
Business and Finance	1
Cognitive Science	1
Computer Science	2
Economics	3
Electrical Engineering	1
Engineering	1
English and Evolutionary	1
Environmental Science	1
Financial Actuarial Mathematics	1
Financial Mathematic and Statistic	2
General Biology	1
Law in Chinese	1
Legal Studies	1
Linguistics with Spanish Emphasis	1
Marketing	1
Mathematics	2
Mechanical Engineering	1
Molecular and Cell Biology	1
Molecular toxicology	1
Physics	2
Pre Human Biology and Society	1
Psychology	1
Psychology and Communication	1
Rhetoric	1
Sociology	3
Statistics	1
Undeclared	1

表4 日本語教育の内容

テキスト	学習内容
A NEW APPROACH TO ELEMENTARY JAPANESE: NEJ —テーマで学ぶ基礎日本語— Vol.1, 2 Vol.1: Unit1-12 Vol.2: Unit13-24	<p>【教育の枠組み】 2モジュールに分け、前半の4週で初級前半である左記テキストのVol.1、後半の4週で初級後半のVol.2が終了するように設計されている。</p> <p>【学習範囲】 Aクラス: Unit 3-24 B, Cクラス: ひらがな・カタカナレビュー—Unit 18</p> <p>【学習内容】 ユニット学習（各ユニットの漢字小テスト含む）のほか、学生達が興味のあるテーマをパワーポイントや現物を見せて発表し質疑応答をする Show & Tell や、当該ユニットで作成したエッセイを授業外でキャンパスの学生を相手に読みあげコメントを貰ってくる Listen my Story (LMS) がある。</p>

3-3 Mid-Summer J-ShIP の実施概要

Mid-Summer J-ShIP は、前述の Summer J-ShIP (3-1) よりも高いレベルのカリキュラムに対する海外協定校からの要望に答えるべく、2015年度夏期に新設した。本プログラムの対象は、後述の Winter J-ShIP (3-7) と同様に初中級レベルの既習者である。実施初年である2015年度には Summer J-ShIP の後半期と並行して4週間実施した。

3-4 Mid-Summer J-ShIP の日本語教育の内容

Mid-Summer J-ShIP は、初級終了程度の学生を対象として日本語教育が行われ、計8名の参加者があった。従って、このプログラムの開講レベルは初中級レベル (Post-Elementary Level) であり「進んだ基礎日本語段階」のレベルといえるだろう⁴⁾。本プログラムは、今年度初めて実施されたプログラムであり、協定校から（以下に説明のある Mahidol University International College から）、初級終了レベルの学生の受け入れのニーズがあったという背景がある（後述する夏超短期プログラムは毎年実施している）。授業初日までの流れは Summer J-ShIP と同様行った。学生達は主にタイ王国の Mahidol University International College からの参加が7名、ルーマニアの Romanian-American University からの参加が1名の計8名である。以下の表5を参考のように様々な専攻の学生達がプログラムに参加している。テキストは“A NEW

APPROACH TO INTERMEDIATE JAPANESE : NIJ

を使用し、4週でUnit 1-10（テキスト全体は12Unitで構成されている）が終了できるよう、スケジュールを組んである。使用テキストは既述の NEJ と同様のアプローチで編まれているため、日々の学習における活動は基本的に同様である。

表5 Mid-Summer J-ShIP 参加学生の専攻

専門分野	人数 (単位:人)
Biology	1
Business Economics	1
Economy	1
Hospitality and Tourism Management	1
International Business	1
Social Science	2
Tourism and Hospitality	1

3-5 夏超短期プログラムの実施概要

短期研修型日本語・防災プログラム (Japanese Language and Disaster Prevention: 以下「超短期」) は、大阪大学において2008年から運営されている (J-ShIP 同様) 短期研修型の留学受入れスキームである。正規単位が付与される日本語授業を提供すると共に、日本の「防災・減災」の各種取組について体験型学習を通じて理解を促すカリキュラムを導入している。夏超短期プログラムでは、派遣元協定校の推薦を受けた学生に向けた初級レベルの学習プログラムを3週間で集中的に実施する。2015年度は後述の春超短期 (3-9) を含めた超短期プログラム全体に対して、スーパーグローバル大学等事業 (スーパーグローバル大学創成支援: タイプA) の一環として、奨学金を支給した。

3-6 夏超短期プログラムの日本語教育の内容

夏超短期プログラムは、初級前半の中盤あたりまでを学習している学生を対象として日本語教育が行われ、計11名の参加者があった。本プログラムは Mahidol University International College の学生達を中心に例年行われているプログラムである。このため、前年度に本プログラムを受講した先輩から話を聞いて当該年度に参加を希望する学生も多くなる。以下の表6に参加者の概要を示す。

表6 夏超短期プログラム参加学生の専攻

専門分野	人数 (単位:人)
Biological Science	1
Communication Design	2
Finance	1
International Business	2
International Hospitality Management	2
Marketing	2
Management Tourism and Hospitality	1

3-7 Winter J-ShIP の実施概要

前述の Summer J-ShIP (3-1) と同様に、Winter J-ShIP も海外協定校の長期休暇期間に合わせて集中的に日本語教育を実施する。本プログラムでは、Summer J-ShIP 既習者など日本語学習暦があり初中級レベルに達している学生を対象としている。プログラム実施期間は5週間である。

3-8 Winter J-ShIP の日本語教育の内容

Winter J-ShIP は、初級終了程度の学生を対象として日本語教育が行われ、計29名の参加者があった。本プログラムは、毎年オーストラリア国立大学とモナッシュ大学から主な参加があるが、今年度はこれに加えてメルボルン大学1名、ドイツのドルトムント工科大学のから2名の参加があった。学生達はジェンダーバランスや漢字・非漢字圏、出身大学といった観点から2つのクラスに分け、基本的にはこれらに偏りが生じないよう混在クラスにした。特にオーストラリアの大学群に関しては、主にアジアを中心とした国からの留学や、定住のため中国や韓国をはじめとした多様な学生が多く在籍しており、一概に均質ではない。このため、事前に送付されてきた出願書類やプログラムの参加へあたってのエッセイを参考にクラス編成を行っている。またこれは本プログラムに限ったことではなく、複数クラス（複数トラックと称しており、1トラックは15人以内になるよう配慮されている）になる場合は、同様の観点でクラス分けを行っている。以下の表7に参加者の概要を示す。

表7 Winter J-ShIP 参加学生の専攻

専門分野	人数 (単位:人)
Accounting	1
Actuarial Studies	1
Art History	1
Asia pacific Security	1
English and Psychology	1
Finance	1
History	1
Industrial Engineering	1
International Business	1
International Relations	3
Interpreting and translating	1
Japanese	8
Japanese and Chinese	1
Japanese and French	1
Journalism	1
Linguistics and Criminology	1
Mathematics	1
Medicine	1
Northeast Asian Studies	1
Specialisation in Global Culture Literacies	1

3-9 春超短期プログラムの実施概要

前述の夏超短期 (3-5) と同様に、春超短期プログラムも3週間の集中講義を実施した。対象者は初中級レベルの既習者である。

3-10 春超短期プログラムの日本語教育の内容

本プログラムは韓国の大学に特化したプログラムであり、2014年度より開始された。2014年度は、韓国の交流協定校である釜山大学校や本センターの教員が開拓した数校から、上級レベルの日本語学習者向けに「アカデミック・ジャパニーズの基礎」を開講したが、本年度は初級終了程度の学生を対象として日本語教育が行われ、計12名の参加者があった。言うまでもなく母語や日本語学習の状況（学習の背景や学習者数等）、さらに大学教育の体系さえも国によって異なるため、ニーズや具体的な要請があり実施可能な体制が整っているのであれば、国や大学を絞り開講することも、短期日本語教育プログラムを考えるに際しての今後の議論となるだろう。本プログラムには、以下の表8のように釜山大学校から多様な学科に所属する12名の参加があった。

表8 春超短期プログラム参加学生の専攻

専門分野	人数 (単位:人)
Agricultural Economics	1
Business	1
Computer Science and Engineering	1
English Language and Literature	1
Food Engineering	1
Geographic education	1
Japanese Language and Literature	1
Linguistics	1
Mechanical Engineering	2
Material Science and Engineering	1
Social Education	1

4 短期日本語教育プログラムに関する 本報告の意義

まず、日本語教育学界においては、一つの短期プログラムに関してその教育内容や受け入れ体制の課題を論じたもの（近藤・丸山 2004、藤森・宮城・中村・荒川 2013）は増えてきているものの、通年での短期プログラム開講状況について報告しているものは少ない。本センターでは、短期プログラムの企画および開発を専門とする短期プログラム開発研究チームとそれらの日本語教育の実施を担当する日本語教育研究チームが協力して、既述の短期プログラムを運営している。このため、通年で教育的な質（日本語レベルや実施期間、受け入れ大学等）の異なる多様なプログラムを開講することが可能であり、本報告にあるように時系列で年度単位の実施を「プログラムの概要」と「日本語教育の内容」に分け、報告することができたと言える。その意味で企画と開発、及び実施に至るまでの体制を年度と言う帯で報告したことがひとつの意義であろう。

次に、本稿から指摘できる短期日本語教育プログラムの特徴についてである。5つのプログラムをみて分かるように、本センターが2015年度に実施したプログラムは全て初習～初中級終了までのレベルであり、その中には初級終了レベルからスタートしたのもも多い。そして、これは2015年度に限ったことではなく、例年同様である。つまり、初習や初級レベルと言えば、学部生正規生や学部に入學する前の予備教育、あるいは半年や1年間の交換留学生を連想するかもしれないが、むしろ本センターが開講しているようなレベルの短期日本語教育プログラムの

ニーズが海外の大学には高いことを本稿では強調できる。加えて、このように短期間でも日本に来て日本語を学び、日本で生活をしてみたいという学生は、日本語主・副専攻に限らず多く存在するという事実である。このような潜在的ニーズを本報告で明らかにできたのではないかな。

また短期日本語プログラムは、近藤（2012）も指摘するように、その後の本学への正規留学を含む日本の大学・大学院への長期留学のきっかけ作りとなり得る。そして、付け加えれば、これから将来を担う若者が短期間でも日本に滞在し日本語を身につけ、文化交流を含む日本生活を「経験」することは、諸外国の日本への理解という観点から、日本の本来的な国際化や国際交流と無関係ではないだろう。

5 まとめ

本稿では、国際教育交流センターの短期プログラム開発研究チームと日本語教育研究チームが協働のもと実施している短期日本語教育プログラムである「J-ShIP」および「超短期プログラム」の2015年度の状況について、年度単位での短期日本語教育プログラムの流れとその内容をまとめた形で示した上で、短期日本語教育プログラムの海外におけるニーズ、実施の意義について論じた。

本稿のように年度を通じていかに短期日本語教育プログラムを実施しているのかについて報告したものはなく、また短期プログラムそのものの意義について言及しているものも、まだまだ多くはない。今後は本センターで行われている各プログラムの詳細を、プログラム全体の枠組みと実際の日本語教育での課題、継続的な実施への取り組みといった点から、報告していきたいと考えている。

注

- 1) 短期プログラムを実施するに際しての諸外国の大学との学期の調整や奨学金の獲得については、近藤（2012）を参照のこと。
- 2) 本稿で報告する短期プログラムは、基本的に月曜日から金曜日までの週5日、1日2あるいは3コマの授業を行っている。具体的には Summer J-ShIP は8週間で90コマ8単位、Mid-Summer J-ShIP は4週間で45コマ4単位、夏超短期プログラムは3週間で27コマ2単位、Winter J-ShIP は4週間で45コマ4単位、春超短期プログラムは3週間で27コマ2単位で

ある。

3) Summer J-ShIP 2015では、初習の学生達を短期プログラムの中では相対的に長く受け入れるという状況から授業時間外に学生達が日々の学習について相談できるオフィスアワーを設けた。短期プログラムでは、受け入れる学生達の背景や日本語レベル、期間などに応じて日々すぐに対応可能な体制を事前に考える必要が特にある。これらについては、別稿に譲りたい。

4) 詳しくは西口(2014)を参照のこと。

参考文献

近藤安月子・丸山千歌(2004)「短期留学プログラム—海外の日本語教育機関との連携—」『小出記念日本語教育研究会論文集』, 小出記念日本語教育研究会, pp.97-112

藤森弘子・宮城徹・中村彰・荒川洋平(2013)「異文化体験型シラバスに基づいたショートステイプログラ

ム2012の実践と課題」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第39号, p.137

西口光一(2014)「総合中級日本語カリキュラム・教材開発のスキーム」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第18号, pp.77-86

西口光一(2012)『NEJ: A New Approach to Elementary Japanese — テーマで学ぶ基礎日本語 —』, くろしお出版

近藤佐知彦(2012)「SSプログラム J-ShIPの一年目—新コンセプト超短期日本語プログラムへの挑戦—」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第16号, pp.97-106

近藤佐知彦・荒木敏子(2009)『平成20年大学教育の国際化加速プログラム(国際共同・連携支援(交流プログラム開発型)) 21世紀型「超短期」受け入れプログラム開発』報告書, 大阪大学